遣シ又兼テ教育事項取調ノ為メ欧洲ニ出張致居候文部省参事官浜尾新ヲ右美術取調委員長トナシ夫々調査為致度且右費用金貳万余円ヲ要スヘキ見込ニ付其内凡金壱万円ハ曾テ閣議ヲ経タル学校建築費ニ充用スヘキ当省所轄地所建物売却代価ノ内ヨリ差繰支弁シ余ハ来年度当省経費予算ニ編入可差出右至急閣議乞候也

明治十九年八月二十六日　文部大臣　森　有礼

内閣総理大臣　伯爵　伊藤博文殿

追テ本文ノ次第ニ付浜尾新出張之儀更ニ凡半ヶ年間程延期シ且便宜米国人ヲモ巡廻セシメ度此段申添候也

稟議之趣認許ス　十九年九月六日

出張命令書

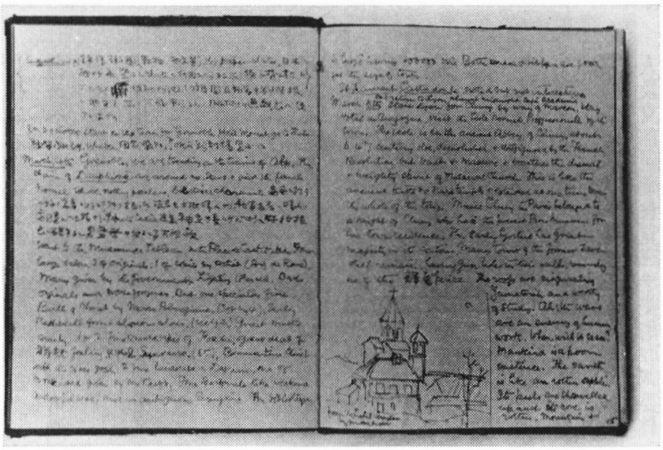
エル子スト、エフ、フエノロサ

美術取調委員トシテ凡九ヶ月間欧羅巴ヘ出張ヲ命ス　但本文期限内ニ於テ便宜亜米利加ヲモ巡回スヘシ

明治十九年九月十一日　文部省

（山口静一著『フェノロサ上』による。）

こうしてフェノロサと岡倉は美術取調委員としておよそ九ヶ月間、イタリア、オーストリア、ドイツ、イギリス、フランス、オランダ、ベルギー、スペイン、アメリカの諸国を巡り、美術学校をはじめとする美術行政上の九項目について取調べることになり、その際、教育事項取調べのため欧州旅行中であった浜尾新が美術取調委員長として彼らに指示を下すこととなった。



岡倉覚三　欧州視察日誌　明治20年　日本美術院所蔵

明治十九年十月二日、両名はアメリカの郵船シティ・オブ・ペキン号で横浜を出港、サンフランシスコに向かった。翌二十年一月に彼らはヨーロッパへ発ったが、それまでのアメリカ滞在中の足跡については十九年十二月四日にニューヨークのオーサーズ・クラブで「日本政府文部省美術調査委員アーネスト・F・フェノロサ教授歓迎晩餐会」が開かれたことが確認されているくらいで、詳細は不明である。

**岡倉覚三の「欧州視察日誌」**

視察旅行中の日程については公式記録が残されておらず、全容を

把握できないが、岡倉の「欧州視察日誌」（『岡倉天心全集』第五巻。昭和五十四年十二月。平凡社）によって少なくとも岡倉のヨーロッパ滞在中の足跡はある程度把握できる。この日誌は明治二十年三月二日に始まり同年八月七日で終っており、視察箇所と視察の感想、日本の今後とるべき方策についての覚え書き、自作の詩や折々の印象などが和文まじりの英文で記されている。これを読むとフェノロサと岡倉は視察において必ずしも同行していなかったと考えられる。左記はこの日誌より抜粋した日程である。

三月二日、リヨンにて美術学校、美術館、ラ・マルティニエール学校（職業学校）、絹織物産業の実情等を視察。

三月三日、ヴォワロン着。国立ヴォワロン職業学校。グルノーブル着。劇場。

三月四日、グルノーブル。女子師範学校。絵画美術館。図書館。サン・ローラン大聖堂。リヨン帰着。

三月五日、クリュニー着。職業師範学校。

三月六日、クリュニー在。アラス（種馬場）。農事試験場。リヨンへ出発。

三月七日、リヨン在。絹織物製造業者訪問。アラール兄弟会社（絹織物仕上げ場）等。

三月八日、リヨン発、ジュネーブ着。

三月九日、ジュネーブ在。浜尾新、千本福隆同行。工業美術学校。美術学校。装飾美術館。時計学校。時計製作場。同附属機械学校。タルタラン。

三月十日、ジュネーブ在。装飾美術館。フェルネ（ヴォルテールの住居）。

三月十一日、チューリッヒ着。

三月十二日、ウィーンへ向う。

三月十三日（以降四月七日までウィーン滞在）クールザールで音楽（ワグナー、マイヤー、バッハ）を聴く。シュタイン(Lorenz von Stein 1815～90)訪問。浜尾新、千本福隆同行。

三月十四日～四月二日、ベルヴェデーレ画廊。リヒテンシュタイン。ツェニン広場。オペラ座。大学。師範学校。ギムナジウム。貴族の学校。教育博物館。シェーンブルン。国会議事堂。シュタイン訪問。

四月三日、カーレンベルク。レオポルドベルク。

四月四日、教科書を見て遊戯具選定。クンストハウス協会。シュタイン訪問。

四月五日、音楽協会。ピクラー書店。シュタインおよびその息子と会食。

四月六日、D・P・C教育省ガウド大臣。市立劇場。博物館（博物誌）。博物館（美術）。シュタイン家。

四月七日、ウィーン発、ヴェネツィア着。

四月八日（以降四月十日までヴェネツィア滞在）サン・マルコ聖堂。総督宮。モザイク工場。

四月九日、美術アカデミアの美術館。研究所。展覧会用建物（建築中）。

四月十日、サン・マルコ聖堂。パドヴァ。サン・アントニオ

聖堂。サン・ジョルジョ礼拝堂。サン・ジュスト聖堂。エレミターニ。サンタゴスティノ聖堂。

四月十一日、ヴェネツィア発、フィレンツェ着。

四月十二日（以降四月十九日までフィレンツェ滞在）ウフィツィ宮。パラッツォ・ヴェッキオ。

四月十三日、ピッティ宮。

四月十四日、美術アカデミア。同美術館。ウフィツィ宮。ピッティ宮。ボボリ庭園。トーマス・ボール訪問。

四月十五日、モザイク製作所。サンタ・クローチェ聖堂。

四月十六日、サン・ロレンツォ聖堂。ラウレンティアーナ図書館。国立美術館。メディチ家礼拝堂。新聖具室。サンタ・マリヤ聖堂。

四月十七日、サン・マルコ美術館。美術ギャラリー。ヴィットリオ・エマヌエーレの劇場。

四月十八日、ホテルにて仕事。

四月十九日、ウフィツィ宮。ピッティ宮。サンタ・クローチェ聖堂。夜、ローマに向う。

四月二十日、ローマ着（以降四月二十六日までローマ滞在）。フェノロサと会う。ボルゲーゼ宮。ヴァティカン、システィナ礼拝堂。

四月二十一日、彫刻ギャラリー。サン・ピエトロ聖堂。サン・パウロ聖堂。サンタ・マリア・トラステヴェレ聖堂。

四月二十二日、ヴァティカンの彫刻ギャラリー。ドリア宮。サン・ロレンツォ、サンタ・マリア・マジョーレ、サン・ジョヴァンニ・ラテラノ聖堂。

四月二十三日、アカデミー。市の美術館。ラテラノ美術館。

四月二十四日、ヴァテイカン絵画ギャラリー。

四月二十五日、コロセウム。フォールム。皇帝の広場。カラカラ浴場。

四月二十六日、トデスコ男爵夫人。夜、ナポリへ向う。

四月二十七日、ナポリ在。国立美術館。水族館。

四月二十八日、ナポリ在。音楽学校。美術研究所。大聖堂。水族館。カステルマーレへ向う。

四月二十九日、ポンペイ訪問。カステルマーレよりローマに帰着。

四月三十日、ローマにて建築家コモット訪問。ピサへ向う。

五月一日、ピサの大聖堂。サン・カヴァレロ聖堂。ジェノヴァの墓地。ミラノへ向う。

五月二日、ミラノにてブレラ広場。オテル・ド・ラ・ヴィル。国立美術館。大聖堂。

五月三日、ミラノにてアンブロジアーナ図書館。二、三の教会。夜ジェノヴァへ向う。

五月四日、ジェノヴァを経てマルセイユへ向う。ロンカンプ美術館。スペインへ向う。

五月五日、スペイン国境入口ポート・ボウを出発。

五月六日、バルセロナ着。ドネツェッティ・オブ・ラ・ファヴォリタにて観劇。

五月七日、バルセロナ発、マドリッド着。美術館。闘牛場。

五月八日、町を見物。コルドバへ向う。
六月二十六日、Glenghiskhan.
八月七日、Celtic from Liverpool, 3rd□.

岡倉の日誌では彼の同行者について詳しく知ることはできないが、ジュネーブと、それに次ぐ訪問地ウィーンにおいては浜尾新、千本福隆が同行したことがわかる。千本福隆は文部省御用掛で浜尾の随行員。東京美術学校開校直後から一年ばかり「数学」授業の嘱託教師を勤める。ウィーンでは各所視察の傍ら幾度もシュタインを訪問して意見を聴き、次いでヴェニスに向かったが、ヴェニスでは同地の美術学校を卒業した彫刻家の長沼守敬が案内に立ち、浜尾、岡倉、フェノロサの三人が揃って視察を行ったことが左記の長沼の証言によってわかる。なお、長沼が帰国（明治二十年八月十四日）後東京美術学校創立事務所に採用されたのは、このヴェニスにおける浜尾らとの出合いが機縁となったものと考えられる。

▼ヴェニスの見物。明治二十年に當時の專門學務局長の濱尾新先生が岡倉覺三氏とフエノロサ氏の兩委員を連れて伊太利の視察に來られた時、私が案内して方々を見物したことがある。岡倉氏は妙な外套を着てゐるので可笑かつた、尤も其時は薄い外套を羽織つてゐる頃であつた。私は彼地の美術學校長に氏を紹介もし講話もして貰つた。當時ヴエニスには有名なチヽアンやチントレッド（ママ）等の畫伯がゐた諸々方々の名勝古蹟を見物するのに僅かな日子であつたから非常に忙しかつた。其折岡倉氏は日本の美術學校の爲めに美術の寫眞を澤山買求めたが熟々私が感心したのは、氏が寫眞屋で買ひ込む中にラフアエルの下畫のスケッチを版にした物に目をつけたのでこれは中々繪の鑑賞眼に富んだ人だと思つた。―下略―

（「岡倉覺三氏の印象」長沼守敬『美術之日本』第五巻第十号。大正二年十月十五日）

委員長の浜尾は明治二十年八月十一日に帰国。フェノロサと岡倉は一旦アメリカへ戻り、同年十月十一日に横浜に到着した。岡倉はワシントン駐在特命全権公使九鬼隆一の夫人をエスコートして帰国し、到着後直ちに報告の手紙（同年同月十二日付）を九鬼に送ったが、その手紙の末尾には次のような記述がある。

○廟堂の上忽地の風雲　教育部も亦多少の変更あり　美術上の仕事モ一年前とは気抜の体に候　小生モ不平多く候へ共先ハ耐忍可仕候　美術学校設立の事は相定マリ候　金モ少ナく思わしからす候へ共人間の事頭ヲ回らせは概ネ愚俗ニ御座候　呵々唯閣下の帰らるゝを相待チ候

（『岡倉天心全集』第六巻。昭和五十五年十一月。平凡社刊。所収）

文面から推察して、出発前と異なり帰国後の岡倉らを取り巻く情況は極めて憂慮すべきものとなっていたことが考えられる。諸計画のうち美術学校設立のみは一応実現したが、それは彼らの理想とはほど遠いものであった。このように「気抜の体」となってしまった

状態を克服するには九鬼の力添えが必要であり、そのために岡倉は九鬼の帰国を待ち望んでいたのである。

### 鑑画会における帰国報告講演

美術取調委員の公式報告書は現在のところ所在不明であり、フェノロサが執筆した報告書草案（『フェノロサ資料Ⅰ』に訳出されている。）のみが残っている。これは報告項目を箇条書きにしただけのものであるが、これだけを読んでも美術教育については、フェノロサ自身「視察団は現行の西洋美術教育制度における嘆かわしい無能ぶりを政府に報告した」（前掲書八六頁）と記しているように、徹底してそれに反対の姿勢を示すものであったことがわかる。なお、フェノロサは森有礼宛書簡（前掲書一二七頁）の中で、欧米の美術教育については、「我々は報告書に印刷したら数百頁にも達するような大量の資料を集めました。」と述べている。

フェノロサと岡倉は鑑画会で帰国報告講演を行った。左記はその筆記である。

○鑑畫會フエノロサ氏演説筆記

貴婦人及紳士諸君　久しく海外に在りて相見るを得ず再び諸君が望みある尊顔を拜するを得るハ余の欣喜に堪へざるところなり今や此演壇に上るに當り特に陳列せる物品に付きて批評を下さんより寧ろ十餘ヶ月間外國に在りて見聞せるところを陳述するの勝れるに如かざるを信す十數ヶ月以前の事なりき余の將に出發せんとするに當り余ハ諸君に向て日本美術の將來望みあるを説き日本固有の美術を進暢するハ日本が世界に盡すの義務なりと唱言せり余の本日演せんと欲するところも亦前日の所説に異ならざるなり獨り異ならざるのみにあらず十數ヶ月の經驗ハ却て前説を確固ならしむるに至りたり出發前余の主張するところハ日本美術ハ固有の妙所あり之を維持するハ日本の國躰を維持すると同一なれハ國躰上より之を保存發達せざるへからずとの主意に止まりき久しく歐米諸國の美術を取調へ來りたる今日より之を見れハ單に此一點より日本美術の保續を説くハ或ハ公平の論にあらざるかの疑なき能はず故に余は今日諸君に向つて日本美術を保存するは世界に取りて大なる利益を與ふるものなりと斷言せんと欲するなり之を概言すれは日本美術は時に或は多少の缺點なきにあらずと雖とも所謂活々として生色あるの美術にして餘他の美術は無機無能死地にあるの美術なれば若し日本美術にして其固有の性質を失はず着々として其歩武を進むるあらば終には世界美術の牛耳を執るに至るべきは蓋し疑を容れざるところなり此説たる敢て余が輕卒の見より出るものにあらず少くとも此美術取調委員か深思熟考且つ之を數多の証左に照し始めて作りたるの結論にして私見又ハ出來心等に由りて妄りに過言をなすものにあらざるなり此説たる實に歐洲諸國美術の沿革に由りて考察せるものにして或は之を歐洲現時の美術教育に照し或は之を美術と工藝との關係に質たし或は之を歐洲諸國美術家の心中に尋ねて始めて結論せるものなり去りなから僅少の時間を以て此等の証左を歴陳する和解にも參らされば先づ其大要を陳ぶべし請ふ先づ歴史上より之を説かん